いと高き所から力を着せられるまで

ルカ福音書24:44-49
（新改訳2017訳）

24:44 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」
24:45 それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、
24:46 こう言われた。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、
24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』エルサレムから開始して、
24:48 あなたがたは、これらのことの証人となります。
24:49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

【祈りながら考えよう】

（１）主イエスは復活後、昇天するまでの40日間に弟子たちに何をされましたか。
（２）旧約聖書で主イエスについて預言されていた苦難と復活はどのように成就しましたか。
（３）いと高き所から力を着せられることは、何の目的のために、誰に対してなされることですか。

【解　説】

（１）40日間にわたって現れ、語られた

ルカ福音書によると、主イエスは復活後、みんなの前で魚の一切れを召し上がられた場所で、お話しになった、そしてそのままベタニアの近くに行って、そこから昇天されたというように思える。しかし、その間が40日間あったということが、使徒の働き1章1-5節の所で知らされる。

《テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。
それは、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じた後、天に上げられた日までのことでした。イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。
使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」》

イエスは40日間にわたって、今日学ぶこういう事を何度か語り、弟子たちにご自身の復活の確かさをはっきっりさせられた。ルカ福音書24章44-49節は、その40日間にイエスが弟子たちに確かめられた事の要約であると言うことができる。従って、これはまことに大切な場所である。

（２）聖書に基づいて語られるイエス

《そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません》

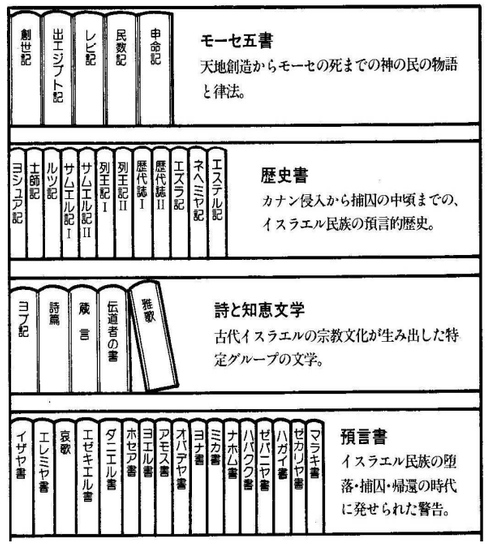
イエスは約三年間、十二人の弟子たちと寝食を共にし、行動を共にされた。その間に多くのことをお語りになった。ある時は群衆を相手に、ある時には弟子たちにだけ内輪でお話しになった。いろいろな事をお語りになったが、イエスが語らんとされたその根本・中心は何であったか。それは、ここにあるように、ご自分のことである。イエスが誰であるか、また何のためにおいでになったかということ、そしてその結果どうなるかということ。イエスのわざ、イエスの言葉、すべてイエスに関してのことが語られてきた。それらのことは、みな聖書に基づいてご自身のことを語られた。

《モーセの律法と預言者たちの書と詩篇》

これは旧約聖書をさしている。旧約聖書は律法と預言者、それと文学（詩篇等）、この３つによって成り立っている。

《モーセの律法》すなわち創世記から申命記まで、普通モーセ五書と言う。《預言者たちの書》は歴史書と預言書の２つに分かれている。歴史書は、ヨシュア記、サムエル記、列王記など、そういったものである。預言書というのは、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書とか、十二小預言書とか、いわゆる預言書である。それから文学というのは、詩篇とか雅歌、あるいは伝道の書とかいうものである。

律法というだけで旧約聖書を指す場合がある。また律法と預言者ということで旧約聖書を指す場合がある。この場合も、《モーセの律法と預言者たちの書》そして特に《詩篇》をあげている。この詩篇には、特にキリストについての預言が多くあり、イエスも詩篇の中からしばしば引用しておられる。



したがって聖書は何を目的として記されたものであるか。それはただ神の御子イエス・キリストを証しする、そのことにつきる。

律法と言えば、何か難しい規定、儀式等が書いてあるから、キリストと関係ないと普通は思う。詩篇という文学的なものも別にキリストと関係ないと思う。

預言書にしても、そこで語られていることはイスラエルに関わることが語られているだけのように思える。しかし、真に読む心をもって読めば、キリストに関して語られていることがはっきりする。

（３）キリストは旧約の成就

律法は一から十まで、私たち人間がすべきことがそこに定められている。ところが人間は、それを一生懸命行おうとすればするほど、行えない自分をそこに見いだす。そのままであれば、人間は神の前に完全に罪人として裁きを受け、神の怒りのもとに滅び去るしかないもの。

人間が救われる可能性ありとすれば、それはただ神から来る救いを望むしかない。そこで神の遣わされたお方、神のひとり子、キリストが切に待望される。律法は私たちの心を、神から来る救いへと待望せしむる。だから律法はキリストに至らせるものであるということが、はっきり言える。

福音書だけでなく、パウロの手紙の中にも、ヘブル書を見ても、詩篇の言葉が引用されている。また預言書は、望みなき人間に対して、きたるべき救い主を待望させる預言に満ちている。

ただしそこにキリストを見ていかなければ、旧約聖書は、イエスを十字架にかけて殺してユダヤ人たちの宗教、ユダヤ教の教典にすぎない、ということになる。

しかしキリストを信じて行く時、旧約聖書は、創世記１章１節からマラキ書のお終いまで、すべて一貫してキリストのことを語っていることがわかる。イエス・キリストの現れること、地上で人として生きられたこと、そして十字架にかけられて死なれたこと、そして復活されたこと、すべて聖書においてすでに語られていることの実現である。

（４）聖書によらなければ偽キリスト

《わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません》

旧約聖書はイエスによって成就した。したがって聖書によらないところのキリストは、すべて偽キリストである。

末の世には多くの偽預言者、偽キリストが現れる。そうして世の人を惑わす。キリスト者すら惑わす。それを何によってはっきり判別するか。聖書である。

真のキリストは、聖書によってはっきりと証しされるもの。それ以外にどんなにうるわしい姿をもって現れても、それはキリストではない。もしキリストと称するなら、それは偽キリストである。勝手に聖書をひん曲げた解釈をもって、自分がキリストだと説くようなキリストは、偽キリストである（今日の統一協会等）。

従って私たちの信仰も、霊的だ、聖霊だ、すばらしい霊的経験だと言っても、聖書と無関係な出来事はすべてキリストと何の関係もない出来事である。御言葉と無関係なるところの霊はすべて悪魔から出る霊である。悪魔は神様に次ぐ所の霊的能力者である。神と対抗して争う霊である。人間の目や心を驚かすくらいのことは十分できる。私たちは何をもって見分けるか。聖書に対する正しい読み方、正しい見方においてである。

（５）受難と甦りの預言の成就

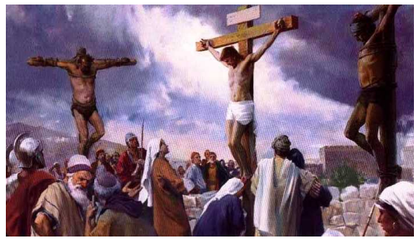
そこでイエスは、具体的に聖書をもってご自身の出来事を弟子たちに教えていかれる。

《それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われ》

主が、心を開いて下さらなければ、私たちは聖書をわかることはできない。主が心を開いて下さってこそ、また御霊がそこに働いて下さってこそ、私たちの心開かれて、聖書の世界に入れられていく。

イエスは復活の体を弟子たちに見せて、あるいは触らせて、食べ物も食べてみせて、ご自身が復活の体をもって確かに甦（よみがえ）ったのだということをお知らせになったが、ただそれだけではない。同時にこのように聖書の言葉をもって、ご自身の復活ということが偶発的な出来事ではない、すでに聖書においてはっきりと語られていたことの実現であるということを、ここに説き明かしていかれる。

《次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり》



キリストが苦しみを受けることは、特に旧約聖書のイザヤ書53章を読むと、そこに悩める、虐げられる、苦しみ痛めつけられる、打たれ傷つく、そして殺される、神の僕のことが記されている。

神の御子キリストはさんざん苦しめられ、ののしられ、さげすまれた。小羊が毛を切る者の前に黙して立つように、屠殺場に引かれて行く小羊のように行く姿は、十字架を負いゴルゴタの丘に引かれて行くイエスの姿である。

甦りについては、イエスご自身が旧約聖書の言葉によって語っておられる所がある。マタイ12章39-40節から、

《しかし、イエスは答えられた。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。》

ヨナが海に投げ込まれ、そして大魚に飲み込まれて、三日三晩その腹の中にいて、そして吐き出されたという出来事をもって、ご自身の復活について語っておられる。

イエスは死んで「よみ」にまで下り、そして甦られた。前の肉体ではなく、自由自在なる霊の体として甦られた。ヨナも大魚の腹を通してこの世に生き返ってきた時は、まるで方向を転換させられたヨナとして現れた。このヨナの出来事は、イエスの復活の出来事を預言するものである。

（６）罪の赦しの預言の成就

《その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』エルサレムから開始して》

イエスの、苦しみを受け、十字架にかかって死んで、三日目に甦るというこの出来事は、何のためになされたのか。

人間は神の前に自分の力では立つことはできない。人間は罪の中に滅びるしかない。

だから神の子が、私たちの受けるべき刑罰を全部受けて、イザヤ書53章に預言されている姿のように、打たれ、蹴られ、辱めを受けて下さった。あれは本当は私たちが受けるべき姿である。それを神の子が全部受けて、しかもその死に打ち勝って甦った。このイエス・キリストにおいて、はじめて私たちは呪われた罪から解き放たれるのである。

だから、心から自分の罪を認め、悔い改め、キリストを信じる、すべてをあげてすがる、そこで、完全な救いを得る。このままで神の前に立つことができる。ただ赦されるだけでなく、神の子として受け入れて頂くことができる。

モーセの律法の中の特に「レビ記」で、一貫して人間の罪・汚れの問題、これをどうしたら赦されるか、きよめられるかということが、様々な罪赦しの儀式、あるいは清めの儀式、定められた儀式において述べられている。

キリストによって成し遂げられたあの十字架の血潮において私たちの罪が完全に赦され、きよめられるその出来事が、レビ記の中で、様々な犠牲の供え物、儀式のあり方、そういうことの定めにおいて語られているということを知る。

（７）私たちは証人

《あなたがたは、これらのことの証人となります》

復活をはっきり見た者、信じた者、そして救われた者は皆、この出来事の証人として遣わされる。キリスト者は皆証人である。復活の証人である。十字架の証人である。ただ口先だけで伝えていくのではない。この身をもってである。

私を見て下さい。私は罪人として、行き詰まっていた、どうしようもない者でした。しかし、イエスを信じることによって、イエスのすばらしい扱いにおいて、今は何の罪の重荷もなく、解放されて、こんなに自由に立っておりますと、この存在をもってキリストの証人として立つ者、これがキリスト者である。

《あなたがた》と言われたのは目の前にいるイエスの直接の弟子たちであるが、その弟子たちの証しにおいて信じて、この救いにあずかっていく者はすべて、この《あなたがた》の中に入る。私たち1人1人がこの48節の《あなたがた》という、この中の1人である。

だからと言って、私は証人だと気負い込んで飛び出していくのではない。それはこの世の人がやること。私たちの救いの出来事は、初めから終わりまで私たちの働きではない。証人だから、キリストを見たから、経験したからといって、自分の勢いで出て行くのなら、この世の人と同じになってしまう。だからイエスは続けて言われる。

（８）約束の賜物ー聖霊

《わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります》

これもまた旧約聖書の中ですでに、父が約束されたものということが言われている。

①イザヤ書44章3節

《わたしは潤いのない地に水を注ぎ、乾いたところに豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ》

そこがどんなに干からびた地のような状態であっても、必ず《わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ》と、神はすでに約束されている。

②ヨエル書2章28-29節

《その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見る。その日わたしは、男奴隷にも女奴隷にも、わたしの霊を注ぐ》

この約束はキリストによって成就する。キリストによって送られる。だからキリストから離れて、約束の御霊を受けるということは考えられない。

もしキリストと無関係に、私は聖霊を受けたなんて言っていることがあれば、それは何の霊だかわからない。

だから私たちはイエス・キリストを信じ、自分の罪を認め、悔い改めて、そうして聖霊を頂くのである。キリストを信じる者には必ずこの約束が成就する。キリストから離れたら、御霊だと言っても何だかわからない。悪霊を間違えて聖霊だと思っているかもしれない。

③ヨハネ福音書16章7節

《しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします》

イエスが十字架にかかって死んで、復活し、神にお帰りになる。そこから助け主、聖霊、約束の賜物が下される。《でも、行けば》主が天にお帰りになれば、《わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします》とある。わたしはその約束のものを送るということである。キリストを信じる者は必ず受け取る。

（９）力を着せられてこそ証人

①《あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい》

証人となったが、自分の働きで証人をやっていくのではない。このいと高き所からの力、すなわち聖霊を着せられてこそ、聖霊によってこの証人たる働きが始まっていく。それまでは都にとどまっていなさいということである。それまでは自分から働いてはいけないということである。

②《いと高き所から》と言うのは、キリストが神のもとに昇天されて、そこから下されるもの、それは聖霊である。

使徒の働き2章にあるように、五旬節の日、まさに約束の御言葉通り、事は成就した。約束のもの、すなわち聖霊が俄然、弟子たちの上にくだった。そして今や、その聖霊の働きの時代である。

③《着せられる》のギリシャ語エンデュオー（ἐνδύω）は、2つの言葉から成っている。「エン」（中に）という言葉と、「デュオー」（沈める）という2つの言葉から成っている。「中に沈める」の意味である。すっぽりと聖霊という着物で着せられてしまう、聖霊の力に包まれてしまうことである（警官の制服のように）。

④《都》はエルサレムである。イエスが十字架にかかられた所、イエスが復活された所である。そこから動いてはいけない。そこが聖霊の降られる所である。キリストの十字架と復活と聖霊の降臨は1つにつながる出来事だからである。

だから私たちも、悔い改めてイエス・キリストを信じ、その信じた所にあって御霊を求め、この約束の御霊を待つのである。御霊を受けることをいいかげんにして、ただ自分の肉の働きで働きまわるのはいけない。

⑤《力》すなわち聖霊の力である。私たちの力ではない。聖霊の働きである。使徒の働き2章から、いよいよ聖霊の働きが始まっていく。ペテロやヨハネは変えられて働いていく。それは聖霊の働きである。

（10）都にとどまっていなさい

《都にとどまっていなさい》

《とどまる》という言葉は、使徒の働き18章にパウロのコリント伝道のことがあるが、その11節に、《そこで、パウロは一年六か月の間 腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた》とある。この腰を据えてという言葉が、《とどまる》と同じ言葉である。だからいと高き所から聖霊の力を着せられるまでは、あなたがたは都エルサレムに腰を据えていなさいということである。

御霊を求める態度は、それこそこの言葉に座り込むことである。あなたが約束を果たして下さるまで、私はここを動きません。それがこの《とどまる》という意味である。上記の都・エルサレムにとどまる、そういう態度で求めていくなら、御霊の経験をはっきりさせられる。